

HFSCC10年史「あしあと」



第6回 「そして10年経った」

(敬称略)

2011年(平成23年) ●そして10年経った

2011年、設立10年が経ち、この年度の2012年2月19日(日)、「東深沢スポーツ・文化クラブ設立10周年記念式典・祝賀会」を執り行った。

寒い中、保坂 展人世田谷区長始め行政、近隣商店会や町会などの地域、東深沢中学校始め近隣小中学校関係、区内の他の総合型地域スポーツ・文化クラブ、その他諸団体の皆様など、ご来賓約70名。自主クラブ代表者、指導者、スタッフなど約100名の参加者があった。

秋山 眞太郎会長の挨拶の後、来賓の若井田 正文世田谷区教育委員会教育長、菅井 芳彦世田谷区スポーツ振興担当部長、野原 明(公財)世田谷区スポーツ振興財団理事長の皆様よりご挨拶いただいた。また、「はじめの一歩の会」の川口 美代子代表が感謝の言葉を述べ、最後に名川 賢吾副会長が式典前半を締めくくった。

式典後半では、クラシックバレエ、お琴、合唱、ギターの4つの自主クラブの演技発表があり、日頃の練習の成果を披露し、賞賛の拍手が送られた。式典後の祝賀会は、同じ体育館で場所を区切って行った。(役職は当時、様子を知らせる会報No.30は [letter30.pdf \(hfsc.jp\)](#))



※1 保坂 世田谷区長(左) 秋山会長(右 当時)



※2 設立10周年記念式典で発表するギタークラブ

この時、10周年記念事業として『東深沢スポーツ・文化クラブ10周年記念誌』を発行した。

設立から2011年末までの年表と写真、座談会「10年を振り返る」、23からなる自主クラブの代表者や指導者による紹介と会員の声などから構成され、中身は5回にわたって掲載してきたこの連載の通りである。

前年の2011年3月11日、「東日本大震災」が起こり、津波により多くの犠牲者が出、東京電力福島第一原発の事故が引き起こされ、日本中は鎮魂と、震災による大きな課題を抱えることになった。

この時 HFSCC では、駒沢オリンピック公園総合運動場内陸上競技場新装オープンに際し、東京都より同競技場でのイベント企画・開催依頼があり、当時発足していた世田谷区の他の四つの総合型地域スポーツ(・文化)クラブである「ようがコミュニティークラブ」「烏山スポーツユニオン」「しろやま倶楽部」「こまざわスポーツ・文化クラブ」と共同主催で「みんなでスポーツ! in 駒沢」というイベントを企画推進中だったが、東日本大震災により中止のやむなきに至った。

残念な結果となったこの経験は、しかし、東京都及び世田谷区の協力を得ながら五つのクラブの協力体制が築かれ、その後のクラブ同士の連携にひとつの布石となった。

10周年記念誌の編集長 塩田 泰之は、その「あとがき」で以下のように述べている。

日本の社会で「コミュニティ」という言葉が日常的に使われるようになって、どのくらいの時間が経ったのだろうか。「コミュニティ」とは、それを口にするだけで、確固たる実体としての「地域社会」が存在するかのような錯覚をおこしかねない、耳ざわりのいい響きをもった言葉である。

個人的には、日本はコミュニティ形成の苦手な国民性を有しているのではないかと思っている。島国という地理上の特殊性から、多民族との厳しい接触を経験してこなかった歴史にその一因があるのかもしれない。

それから9年後、「新型コロナウイルス」の世界的流行であらゆる活動が制限される事態となった。パンデミックが人々の行動を制限し、新しいコミュニティ作りの機会や、仲間との再会を阻害した。日々アップデートされる技術により、世界のどこにいても、どんなに遠くても人は一瞬で「つながれる」が、一方「人は孤独では生きづらい」「人は生のコミュニケーションを欲する生き物である」ということを痛いほど学んだ。

共同体、地域社会と訳される「コミュニティ」が示す範囲は本来、地理的、物理的エリアを指すのかも知れない。しかし、構成する人々にとっては、心理的な距離感から生まれる、一人ひとりの帰属意識や心的本籍地の円が、ずれながらも重なり合い、重複するところに「コミュニティ」は創られるのではないか。

塩田はこうも述べている。

想像した通り、日本社会でのコミュニティ形成の難しさ、一方でそれを克服しようとするクラブ運営者の並々ならぬ努力、冷めていたはずの自分が、ふと熱くなっていたりする。

記念誌の編集を通して、時に迷走し、時に逆戻りし、時に目覚ましい成果を上げる HFSCC の姿を再認識させてもらった。地域社会を構成する組織のひとつとしてこのクラブが健全に成長していくことは、必ずしも容易な道ではないかもしれない。10年を契機に、もう一度自分の足元を見つめ直し、次の10年に向けて一歩一歩地道な歩みを続けていく必要があると強く感じさせられた。

2021年に「20周年」を迎えた HFSCC だが、「10周年」以降の10年は、クラブの一大イベント「フェスティバル」のノウハウを整備したり、新規の自主クラブを発足させたり、「クラブマネジャー」などの資格取得者を増やしたり、ホームページをリニューアルして外部への発信を心がけたりと、できる範囲での成長に努めてきたが、課題は山積している。

今後教員の働き方改革に連なる、「中学校部活動の地域移行」の世田谷区におけるトライアル事業の対象となり、どのように取り組んでいくか。

組織的には「世代交代」は根源的な課題であり、新しい人材を常に求めている。

運営メンバーが中心となってワークショップを行い、総合型地域スポーツクラブの意義の再確認、HFSCC の環境分析、理念・ビジョンの検討、具体的な取組み内容の検討等を行い、5年後、10年後の目指すべき姿を目標として定め、できることから一歩一歩進もうと模索している。

東日本大震災以降「絆」という言葉が日本中を覆い、「地域力」構築や見直しを、と叫ばれて久しいが、しかし、今ほど「地域」の関係が希薄なのも事実ではないのか。

東深沢スポーツ・文化クラブの存在が、地理的にも心理的にも、少しでもこの地域の人々の役に立つのなら。やさしい「おせっかい」が、人々を見守り、支え合う地域になれるのなら、微力でも役に立ちたいと、今日もわらわらと集い議論し合うスタッフの後ろ姿を、私は見つめている。

※『HFSCC10年史「あしあと」』は今回をもって終了します。ご高覧、ありがとうございました。

ご意見、ご感想などは hfsc.c.kouhou.2022@gmail.com にお寄せください。